

ヨハネによる福音書1章14節 「肉体を取られた神の言葉」

1A 初めにあった「ことば」 1-5

1B 永遠の昔 1-2

2B 万物の創造 3

3B 命と光 4-5

2A 肉体を取られた「ことば」 14

1B 神と人の仲介者

2B 人に同情される方

3B 罪の除去

3A 私たちの間に住まわれる方 14

1B 神の栄光

2B 恵みとまこと

本文

ヨハネによる福音書1章を開いてください、私たちは今日から新しく、ヨハネによる福音書の通読を始めます。午後は、1章前半部分で、1節から18節まで見ていきたいと思います。今朝は、14節に注目します。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」私たちは、間もなく主の降誕をお祝いしますが、この箇所はまさに、主の降誕、クリスマスの意味を深いところから教えてくれる箇所です。永遠の昔からおられて、天地を造られた神が、肉体を取られた、人となられたという出来事です。約二千年前にお生まれになったイエスが、インマヌエル、つまり神ご自身であられ、私たち人間と共におられるということです。

1A 初めにあった「ことば」 1-4

「ことば」というのは、ギリシア語のロゴスです。私たちの教会が、カルバリーチャペル・「ロゴス」東京と名づけていますが、そこから来ています。ロゴスとは、「言葉」という意味があります。けれども、単なる言葉以上の存在です。

1B 永遠の昔 1-2

1章1-2節を見てください、「1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。2 この方は、初めに神とともにおられた。」ここは一体、何を表しているかと言いますと、創世記1章1節が背景にあります。「はじめに神が天と地を創造された。」そして続けて、2-3節も読んでみます。「2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。」初めに神が天地を創造されましたが、その時に神は、言葉をもって造られています。「光、あれ」と言われると、光がありました。この

ことが背景となっています。

実は、聖書の中で最も古い時を描いているのは、創世記 1 章 1 節ではなく、ここヨハネ 1 章 1 節なのです。創世記 1 章 1 節では、神が初めに天地を造られたことを明言していますが、ヨハネ 1 章 1 節では、神が天地を造られる前から既にこの方はおられたということです。この方は存在しなかったことはなく、永遠の昔から存在し、生きておられた方であります。そして神は、言葉によって全てを造られましたが、神の言葉自体が人格を持った存在であるかのように、その後、聖書では語られていきます。

そもそも言葉というのは、単なる記号ではないですね、言葉を語る時には、その背後に人格があります。その言葉を発する考えがあり、その考えている存在がいます。ヘブル人への手紙の著者は、神のことは預言者たちなどによって語られてきたが、終わりの日は御子によって完全に語られたのだと言います。「ヘブル 1:1-2 神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られましたが、この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。」つまり、イエスが地上に現れた時に、この方を見れば、神が何を語られているのか、完全に明らかにされている、説明されているということです。この方を見れば、神ご自身を見ていることと同じであり、この方と神は一つなのだということです。

2B 万物の創造 3

そして、この方が全てのものを造られたことが、3 節に書いてあります。「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。」非常に明確に、この方がすべてのものを造られたことをヨハネは述べています。使徒パウロも、コロサイ人への手紙で、明確に、この方によって全ての物が造られたことを語っています。「コロ 1:16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。」

私たちが、自分の力と知恵によって存在していると考えることほど、愚かなことはありません。原子の世界、DNA の世界を見れば、そこに何らかのデザインがなければ、偶然に成り立つなどあり得ないことは明らかです。今、自分が息を吐いて、心臓がたった今、動いていますが、その絶妙な体の機能がいささかでも崩れたら、たちまち死んでしまうのにも関わらず、それでも自分自身で生きていてと考えてしまいます。ダニエルが、バビロンの最後の王、ベルシャツアルに対してこう言いました。「5:23 ..あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」自分の息を今、この瞬間に取り除くことのできる方がおられるのに、その息をもって、「神はいない」と言っている愚かさです。

人の持っている根本的な問題は、全ての根源が神にあり、イエスにあることを知らない事です。ラオディキアにある教会に対して、イエス様は、「3:14 神による創造の源である方がこう言われる。」として現れておられます。そして、「3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」万物の根源である存在を考慮しないことは、それは自分の命の源を否定しているようなものであり、そこには霊的な貧困、困窮状態をもたらしています。これが、数多くの人たちが、「私は神は要らない」「キリストなんか、私に関係のないことだ」と思わせている原因です。

3B 命と光 4-5

そして、この全てを造られた方だからこそ、そこには命があり、また命があるところに光があるとヨハネは伝えています。「4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」神がすべて肉なる者の命を造られているのですから、この方にいのちがあるというのは当たり前です。しかし、ここでの「いのち」は肉体の命以上に、霊的な命であります。つまり、神のいのちにつながっていることによって、今の自分が成り立っているのだとする、いのちです。自分は神によって生かされているのだということを知って、この方に感謝し、賛美し、献げるところにあるいのちです。イエス様は、永遠のいのちのことをこのように言われました。「17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」この方を知ることだということです。知るとは、人格的に知ることです。親密に知ることです。知的な知識のことではありません。

私たちは、分断され、孤立している社会に生きています。人と人のつながりを、その人格の触れ合いを避けて生きている社会です。自分が傷つくのをおそれて、人には心を明かさず、自分の殻に閉じこもる社会に生きています。その自分には大きな自我が横たわっています。誰にも触れられないようにしている自我が心の王座に着いています。けれども、そこには命がありません。肉体は生きているかもしれませんが、本当の意味で生きていないのです。なぜなら、本来人間は、すべてを造られた神につながっていることによって命を持ち、そしてその神にあって、互いに交わるところに真実の命があるからです。

そこで、いのちのあるところには「光」があるとします。光とは、すべてを明らかにします。隠れて行なっていることも、白昼にさらされます。しかし、そうした光の中にも、自らが何も恐れることなく、生きることができるのは、「どんなことであっても、全てを知っているのに、それでも自分を愛しておられる神がいる。」ということを知ることです。自分のした悪いことについて、罪について、キリストが血を流してくだり、罪が清められていることを知るならば、光の中にも自分は安心していられます。「Iヨハ 1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

そして、光が闇の中に輝いていて、闇はこれに打ち勝たなかったとありますね。闇を打ち消す唯

一の方法は、光を灯すことです。人々は、自分の心の中にある闇を何とかしようとしていますが、結局、闇があります。それは、暗い部屋にいて、その暗さを打ち消そうとしているようなものです。スイッチを付けて、照明を灯せばよいのです。つまり、光であられるキリストのところに来れば、自分にも全体に光が与えられ、これまでの闇が全て打ち消されるのです。

2A 肉体を取られた「ことば」 14

これまでが、「ことば」の説明でした。永遠の昔からおられて、全てのものを造られ、いのちであられ、光でもあられます。そしてこの方が肉体を持った、人となったというのが 14 章なのです。「**ことばは人となって**」とあります。ベツレヘムの家畜小屋で、飼葉桶に寝かされた赤ん坊は、ことばが肉体を取られた瞬間でした。イザヤはこのことを前もって預言して、こう言いました。「9:6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」

1B 神と人の仲介者

何の目的で、神である「ことば」が人となられたのでしょうか？第一に、神が人に対して架け橋を作るためです。イエス様が、このようにニコデモに話されました。「ヨハ 3:13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。」天に上るといのは、「人が努力して、神に到達する」と言ってもよいでしょう。宗教は、まさにそれが目的です。人が、修行を行い、戒律を守ろうとして、何とかして神に到達する、天国に入ることを目的としています。創世記に、それを行った形跡を見ることができます、バベルの塔です。人々が塔を建てて、天に届こうとしました。ところが、混乱だけが残りました。人々は、自分で何とかして神に到達しようとしたところで、もっと多くの疑問が生まれ、混乱が生まれます。

そもそも、有限の人間が無限の存在に到達しようとするのが、どだい無理な話です。けれども、無限の存在が有限の存在に近づくことはどうでしょうか？それならできます。それが、「天から下って来た者」ということです。神が人に近づいてきてくださったのです。これはちょうど、深い穴に落ちてしまった人について、その人が地上に這い上がることは無理であっても、地上にいる人が綱をつかって下まで降りて行って、穴の底にいる人を引き上げることはできるのと似ています。神が人となるということは、天から下って来たことを意味します。イエス様は、完全に神であられながら、なおのこと完全に人となられました。神であり、人である方です。このように、神と人との仲介者になられたので、神が人を救うことができるようになりました。「I テモ 2:5 神は唯一です。神と人との仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。」

2B 人に同情される方

そこで第二に、神はこの方であって、人に同情することができます。「ヘブ 4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」私たちが、神があまりにも遠くに感じる時は、自

分の弱さを覚える時です。病の時、自分が神から遠く離れているように感じます。神は、いつまでも生きており、眠ることも、まどろむこともないのに、それで、眠る必要のある人間、体の弱さを持つ人間をどうやって知ることができるのか？とってしまいます。

けれども、イエス様は、神であられながら同時に、人であられました。イエス様は、疲れを覚えて井戸のそばに座っておられました(ヨハネ 4 章)。他のユダヤ人と同じように、納税もしなければなりませんでした。そして何よりも、誘惑を受けられました。そうです、イエス様は誘惑を受けました。悪魔によって、「神の子なら、この石をパンに変えなさい。」「神殿の頂から落ちれば、天使が助けしてくれるでしょう。」「世界の栄華は、私を拝めば与える。」という誘惑を受けました。それぞれに、主は御言葉を持って立ち向かい、また神に従うことによって立ち向かいました。

私は今週、誕生日の翌日の朝、本当にちょっとしたことで、背中筋を痛めてしまいました。起床から起きる時に、痛めたのです。今も首を上げたり、一定の方向に向けると痛みが走ります。けれども、イエス様はそれも全て知っておられますね。背中に鞭うたれ、そのまま木を背負わされて、そして手足に釘が打たれて、十字架に付けられたのです。病というあらゆる病、あるいは怪我について、もはや「神は遠くに離れている」とは言えないのです。神はキリストの受けられた病によって、私たちの弱さを知らないことはないのです。

3B 罪の除去

そして、神が肉体を取られたということは、第三に、人の罪を取り除かれるためです。ヘブル書の著者は、詩篇にあるキリストの預言を引用しています。「10:5-7 ですからキリストは、この世界に来てこう言われました。「あなたは、いけにえやささげ物をお求めにならないで、わたしに、からだを備えてくださいました。全焼のささげ物や罪のきよめのささげ物をあなたは、お喜びにはなりませんでした。そのとき、わたしは申しました。『今、わたしはここに来ております。巻物の書にわたしのことが書いてあります。神よ、あなたのみこころを行うために。』」旧約においては、家畜が、いけにえとしてささげられていました。しかし、それは完全に人の罪を清めることはできません。神を満足させる完全ないけにえが必要です。それで神は、ご自分の子を人として地上に遣わし、からだを備えられたのです。つまり、イエスが赤ん坊として生まれたその肉体は、なんと、初めから罪のためのいけにえのための肉体だったのです。そうすることによって、初めて私たちの罪を根こそぎ取り除くことができるのです。

3A 私たちの間に住まわれる方 14

そしてヨハネは、「**私たちの間に住まわれた**」と証言しています。ここの「住まわれた」という言葉が大事です。単に生きていたのではなく、彼らの只中に共に生活をしてくださったのです。最も生活臭のあるところの只中に来られました。そして、単に哲学でもなく、思想でも、趣味でも、感動する映画でもなく、私たちの生活で最も生々しい生活の舞台で生まれたのです。教会というと、一般の人々はステンドグラスのような礼拝堂を思い浮かべます。私がクリスチャンになって、先輩たち

が祈り会をしていました。そこに加わると、私は喜びました。なぜなら、「僕は、トイレにいる時に、とても集中して祈れる。」と言った先輩の言葉があったからです。その時に、スタンドグラスのある教会のような厳かな雰囲気のところしか、祈りの聞かれる場を考えていなかったのです。しかし、最も人間臭い場において、そのど真ん中で祈りを聞かれる神がおられるということです。

私たちは、キリストがお生まれになった時の環境を知っています。ベツレヘムに行き、どこも宿は人がいっぱい、マリアは飼葉桶のあるところ、つまり家畜にいるところで出産しました。今の状況に直せば、陣痛が始まって病院に行ったけれども、どこもいっぱい、なんと待合室のところ、お産してしまったようなものです。私は女性の気持ちはもちろん分かりませんが、衆人の目にもさらされて、非常に恥ずかしい思いをしているような感じでしょう。私たちは、大抵、自分自身に壁を作っています。私が教会に初めて来た時は、「私のようなものがクリスチャンになったら、この人たちを汚してしまうかもしれない。」と思ったものでした。自分自身で敷居を高くしてしまったのです。けれども、イエスの生涯を見ますと、そんな自分の負い目のところに、誰にも見せられない隠されたところを全て知っておられて、私の汚物の後始末をしてくださるほど、へりくだり、仕えられたということです。

1B 神の栄光

ゆえに、「**私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。**」とあります。人となってださり、ど真ん中で住んでくださったので、ヨハネは神の独り子としての栄光を見ることができたということです。羊飼いが野原で羊の番をしている時に、天使の軍勢を見て、彼らが神への賛美を歌っているのを聞いたのと同じように、私たちは、自分の最も負い目になっている部分、人に触れられたら困ってしまうような恥ずかしい部分、そして今でも傷になっている、自分の過ち、自分の罪の部分、そこをご自身の肉体によって負ってくださった方のことを思う時に、私たちは、最も低められている時に、いと高き所におられる神の栄光を見るという恵みにあずかります。人々が高められている時に神の栄光を見るのではなく、なんと低められている時に見るのです。放蕩息子が、自分が最も惨めな時に父のところに行ったら、息子のために父が祝宴を開いたのと同じです。

2B 恵みとまこと

そして、「**この方は恵みとまことに満ちておられた。**」とあります。この方が栄光を現す時は、弟子たちが霊的に優れていて、調子よかったから見たものではありません。彼らがただ、共に生活をしてくださるイエス様のそばにいたから、その栄光にあずかれたのです。恵みなのです。その恵みの中に、神のまこと、真理も満ちていたのです。このように、神は私たちに、ただ真理を、正しいことを伝えるだけではありません。人の只中に入られて、恵みで満ちし、そして真理を知らせてくださいます。